

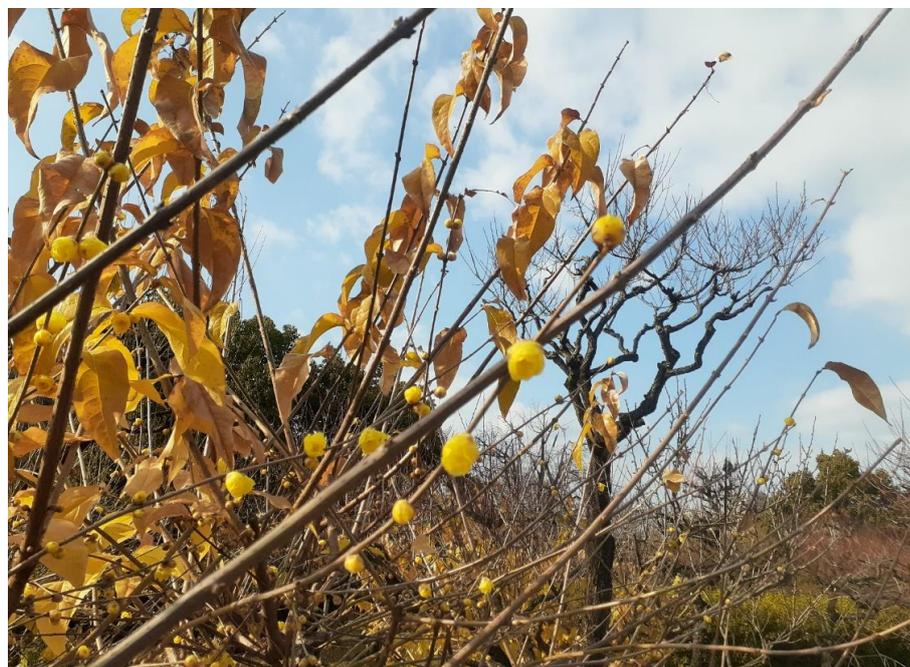
essais こころみ 2023年1月

2023年1月1日（日）

2023年、初日の出



元日午後、大阪城公園の梅林の蠟梅



2023年1月2日(月) 曇

今日は雲が多いけど、昨日元日の大阪は冬晴れ。今日2日はデパートなどが「初売り」、街はすでに動き出した。

－ 2023年始動 －

年末年始、穏やかな天気が続き、元日も全国的に太平洋側は晴れた。例年新年のお祝いは旧暦ですので、朝の宴のあとは、のんびりと、大阪城公園の梅林を自転車散歩。水仙がきれいに咲いていた。

穏やかな2023年の幕開け、さて社会は世界は、どんな年になるでしょうか。どうあっても、個々人の内々は穏やかな一年でありますように。

2023年1月4日(水) 冬晴れ

今日も大阪はよく晴れている。年末から年始にかけて穏やかな天気が続く。6日は「小寒」、11日「鏡開き」、「のこり戎」。

－ ピアニストの対話から －

日の並びのせいか、この年末年始は非日常感がなかった。いつもの一週間がすぎた感じ。先週28日水曜、今日水曜、夜「女性チャレンジ応援拠点」の担当日。

年末、クリスマスイブに合った「ゴンチチ」の拡大プログラムは聴き逃しで5回は流していた。結成して長年になるのに、互いに丁寧語で話す二人の独特の口調が和み、時々笑わされる。

2日の夜、7時のニュースのあとに始まった「反田恭平」さんの番組。一昨年ショパンコンクールで優勝し〈時の人〉になった若手のピアニスト。前回は8月だったというから、年数回の特別番組のよう。

ゲスト二人もピアニストで、みな20代の同世代。前半と後半で一人ずつ対話しながら進んだ。しだいに耳を澄まして聴く。一つの世界を共有しながらも、彼ら三人三様のアイデンティティーに応じたアプローチ。

ピアノでたべていくと決めたからにはコンクールでの上位入賞が必須と活動開始初期に世界の名だたるコンクールの重ねてチャレンジしたという話は印象的だった。

活動10年の自分史の中で一番の物語とゲストの一人が言ったのだった。その話に反田さんが静かに、「わかる…」。音楽を学んでもそれを仕事にしていける人は、本当に限られるからと続けた。

「あの経験をしたから、大抵の努力はこなしていける感じがする」と話す二人の、その経験がどれほどだったかはわからないけど、なんとなく想像はできる。

よくがんばったなあと後々自分でも感心するようなアプローチを一度は経験する。三度あれば、もっといい。そうすれば、自分の内うちに、自信と誇りがすわる。

言葉にするとやばった「自信と誇り」を実態にそうように表現できないかと考えた。そして浮かんだのは「水のように」だった。「自信と誇り」が水の中に溶け込んで、内うちに沁みわたる。

それにしても「水のように」だなんて、これはかの音読の影響か。

2023年1月6日(金)小寒 曇→晴

朝一番は曇り空、これから徐々に晴れる予報。今日は「小寒」、寒の入り。次は「大寒」、その次はいよいよ「立春」。12日には日の出時間も反転、気持ちは春をさきどり。

ー 今年のテーマになるか ー

なにかの拍子に体について気づくことがある。目の運動の一つに薄目を開けるのが効果的だそうで、先日歯磨きしながらやっていたら、口を小刻みに動かしてゆすいでいた時に、それがやりやすかった。おっ!

パソコンにむかってアイデアを練っていてもなかなかパツとせず、気晴らしがてら買い物に外へ出て歩き始めたら、アイデアがふわっと湧いてくることはよくある。

そんなこんな気づくだけで、人間の体もまた宇宙というのがよくわかる。そういった意味でも、『フェルデンクライス』は理にかなった身体メソッドだと思う。知っている人は多くないけど。

体が体にわからせる、体が心にわからせる。昨日は、“これに気づいてよかった…”ことがあった。自分のふるまいに注意喚起、仕事以外で、自分から目立つようなことをしない。

“見た目”だけでも今は十分目立つ。久しぶりに会った人は必ず真っ先に髪の色をみて、「きれい!」。どんな色に見えているか、自分ではわからないけど、何かあっても個人の特定はできそうだったりする。

カラートリートメントが髪に合っているので、髪の色はそのままにして、でも仕事以外で、気軽に初対面でも会話を誘うのは、控えるでしょう。相手が話せば話し、そうでなければ、その場の雰囲気にかかせる。

お昼に外出して北浜へ戻る地下鉄の中で、そうすることにした一連のことがランダムに頭に浮かんだ。何がそうさせたのか。乗り慣れた地下鉄、ドアに映る自分の顔、など等が相まって、脳に働きかけた…?

ワークとライフの、ライフの今年のテーマは「目立たないようにする」に決めようと、今のところ思っている。

2023年1月8日(日)早朝

2023年初の満月が西にしずむ直前



2023年1月9日(月)

大阪城公園梅林の蠟梅、今年も咲く



2023年1月10日(火) 晴

今朝もよく晴れている。昨日から「えべっさん」。ニュースはまだチェックしていないが3年ぶりの「福男」はだれに。

－ ラテン語 －

7日土曜の午後になんばのジュンク堂へ行った。やはりもいちど「孫子」を探そうと思った。昨年買った2冊のうち一冊は失敗、もう一冊を読みはじめたが、どうもしっくりこない。

なんばのジュンク堂は商業ビルの三階にあり、ワンフロアで広い。入口の右に長いレジカウンターがあり、その正面に楕円の面長な島型の低い棚が置かれていて、新刊や話題本が並んでいる。

まずはここからみる。レジに対面する側には一般によく読まれる本が表紙面に置いてある。ぐるっと反対側へ回ると、アートや哲学書などが同じように並んでいる。

そこに『教養としてのラテン語の授業』があった。昨年新聞の広告へみたときにちょっと関心をもった本。ああ、これ…、手にとって表紙をあけると、なんと「若松英輔」の名。推薦文をよせていた。

これだけでも十分「買い」。著者の序文とプロフィール、そして目次をみて、やはり「買い」。そう決めて、「孫子」を探しに。店内の検索機で4冊候補をあげ、最終的に、そう、これこれと決めたのが岩波ワイド版。

今朝の〈話す〉で紹介したように、しっくりくる。信頼して読むことができる気がする。読む気がでてくる。もう一度探すことにしてよかった。

よかったのは、先の『教養としてのラテン語の授業』もそう。著者の誠実さ、学びの深さが伝わる。単語を調べたりしていると、時々、「語源はラテン語の…」と書いてあったりするけど、まったく興味はなかったラテ

買った日の夜に読みはじめ、合い間に読んでいる程度だけど、すぐ手にする気になるからか、3分の2ちかくまで読んだ。なんだか、著者を対話しているような感じがする。今回は大正解の2冊。

2023年1月11日(水)

冬晴れ、お昼休みに運動がてら大阪城公園梅林へ





2023年1月13日(金) 曇

今朝は薄日、午後には曇って、日曜にかけては雨の予報。今日は歩くとポカポカ、でも来週はまた寒くなるから、油断禁物。日の出時間も昨日から反転、まだまだ寒いけど、いよいよ新しい春がくる。

— 「一年の計」への専心 —

先週は、“まだ6日か…”、今週は、“もう13日…”。椅子に背もたれしていた上半身をパッと起こす、そんな気持ちになった。

正月もあつという間に過ぎてゆく。例年立春前後には今年の「計」を確定させる。それまでは、自分におとずれる兆し、徴候を捉えようと目をほそめる。実際にそうするのではなく、そんな心境になる。

昨年後半の流れは今年にどういう意味をもってくるのか、年末から年始、正月中にかけて視たり聴いたりしたことの中に今年を特徴づける何かがあるのではないかと、そんな風に考える。

6日に書いたとおり、一つ候補はあがっている。もう一ついま浮上しつつある、自分の中で。それも残り半月の間で、別なことと入れ替わるかもしれない。

それほどこの間は特に、些細におもえることにも、これは何か意味があるのではないかと、前触れではないかと、などと意識をむけることにしている。いくつか気になることが上がって、2月に入る頃には集約して一年の

決めた計は実践しなければいけないけど、すべてできなくても、かまわない。計に専心する過程、年数の積み重ね、それこそ大事なのではないか。自分で自分を拓くことになるのだから。

2023年1月16日(月) 曇

朝なのに外がくらい。雨が降りそうで降らない。土曜の午後からずっと同じような空。28年前のあの日を思い出す。予報では午後から晴れ。予報どおりになるますように。

－ 散策しながら対話するような －

『教養としてのラテン語の授業－古代ローマに学ぶリベラルアーツの源流』。著者は東アジア初、韓国人初のバチカン裁判所弁護士。精一杯やって何かを一つ成し遂げた人だけが到達できる境地、しかも柔らかくて慈しみ深いのは著者ならではのもの、そんな感じがした。

Lectio I から Lectio XXV III まで、読者に語りかけるように書かれているせいか、むりなく読み進められる。自国を客観的に視られる人だから、苦言を呈しつつ、特に若い人たちを励ます。韓国はアメリカ以上の競争社会と言われている。

この本には、最初に「若松英輔」が推薦文を寄せているのを見て、迷うことなく「買い」を決めた。そういう一冊には何かしらまた?!があるもの。本編のおすびに、「モンテーニュ」の言葉が引用されていた。読むべくして読む本だったと思いながら、読み終えた。

せっかくだから印象的な一文を2つ紹介しよう。一つは著者の大先輩が語ったという一言。

「愛が頭から胸まで降りてくるのに70年かかった」

そして著者から読者への励まし。

「全身全霊で打ち込める何かに出合えたら、それだけ努力した後に訪れるゆううつも経験してみたい。それでこそ目の前に、きっとまた新しい世界が広がるはずです」

2023年1月18日(水) 曇

今朝も曇り空。寒さはそれほどでもない。明後日は「大寒」、次は「立春」。待ち遠しいけど、寒さはこれからピーク。どんな年は「バレンタイン」前後に寒波が来た。いつまで寒いか。でも春はまたくる。

－ 先輩たちの背中 －

月曜に今年の年賀状をファイルした。年始に届いた時から今年はYさんから来てないなあと気づきながらそのままだった。気になって電話した。手紙のやりとりが主だったから電話はたぶん10年ぶり。

スマホも自宅も長くコールしたけど、つながらなかった。会社を早期退職して鹿児島の実家にもどり、お母さんの介護を長年されて、今は一人住まい。さて…、電話番号と住所しか知らないし…。

でもホッとした。その日の夕方に電話があった。スマホをカバンの中に入れてままで、いま気づいたと、「画面をみて、びっくりした、どうしたん!」。ハリのある元気な声が耳にとびこんできた。

今回はじめて年令をたずねた、81才。声の感じは以前とあまり変わらない。それに感動した。すると、「町のスポーツセンターに通って運動を続けているし、詩吟も習っているのよ、70才になると、ガクツとくるよ!」。

10分ほど話して電話をきったが、しあわせ感がふわっと自分の中でひろがった。元気でよかったという気持ちと、日常を愉しむYさんの様子が声からも伝わったからだ。あらためて、電話っていい…。

去年は手紙を出すことを小さなマイプロジェクトにしたけど、今年は電話にしようかと思った。去年の「手紙」プロジェクトは、過去の記念切手を旧知の人からたくさんもらったからだった。この年令になって「きよみちゃん」と呼ばれる唯一の人。

この人も独り暮らしだから、今年は電話をマメにしようかしらと月曜に思っていたら、当のご本人から今朝手紙が届いた。年末年始の様子、いまトライしていること、今年の過ごし方などが、4ページにわたって書かれていた。はげむ様子がみえるようだった。

先輩たちの晩年、その人それぞれの暮らし、営み。それをかい間知って、こちらがほのぼのとした気分になる。無理なく自分らしく生きている姿が清々しく感じるからだ。「電話」、実行することにしよう。

2023年1月23日(月) 雨→曇

今朝は雨、午後からは曇、明日あさってはこの冬一番の寒さになる予報。昨日旧暦でも年が明け、新旧ともの新春を迎えた。2月4日は「立春」、寒さはまだ続くけど、陽の明るさがかわってくる。春がくる。

－ 2023年本稼働 －

先週の日経タ刊コラムに旧正月のことが載っていた。アジアのほとんどの国では旧暦で新年を祝う、日本がそうじゃない方が珍しいのだと。でも今も旧暦で祝うところもあるのではないか、たぶん。

雛祭りや端午の節句などがそうだ。数字だけそのまま、新暦の3月3日、5月5日では、桃の花も菖蒲もまだ早い。伝統を重んじる土地では今も旧暦でやるところも少なくない。

旧正月元日は韓国では朝に法事をする。大きいお膳や座敷机いっぱいにお供えものをして、天地や先祖の恩徳に感謝し、新年をとともに祝う。旧暦の8月15日も同じようにする。

両親がいる頃にはただただ言われるままに手伝っているだけなのが、上の代がいなくなると、自然に自分たちがやるようになる。やらないという選択肢を思いつきもしない。

旧正、旧盆に加えて、祖父母と両親の法事も毎年するのが〈韓流〉。先祖や目にみえない何かを敬う気持ちを持ち続け、家系や家族のつながりを維持させる一つの装置ともいえる。

まずは今年最初の儀式を終え、旧暦でも新年を迎え、2023年の本稼

2023年1月25日(水) 晴れ

マイナスの気温、さすがに寒い。でも着るものでしっかり防寒したので、ふるえ上がるほどじゃない。北浜上空は冷たい空気で澄んだ青い空、各地は雪の影響大。

－ 最後の電話 －

地下鉄の北浜駅をおりて、エスカレーターで地上へ向いながら、徐々に見えてくる青い空とビルの外壁一面にさす陽ざしに晴々とする。上りきって広い空をみる。雲がまったくない、風もない。気温は-2℃。

17年前の2006年2月にソウルへ行った。その時の一日を思い出した。空は晴れわたり、太陽は春めいて明るく、風もなく、見た目は暖かそうなのに、寒さが凝縮しているような、緊張感のある寒さというか、そんな寒さのあの日を。

堺筋を事務所の方へ歩きながら、あの寒さを思い出すと同時に、Kさんとのことを思い出した。

大企業を定年退職し、悠々自適生活をしばらくソウルで送っていた。東京へ行った時、仕事で知り合った人を通して知り合った。ソウル行きはもう決めていたKさん、「もしソウルに来ることがあったら、連絡してよ」。

数カ月して知人から、「まだ来ないのかと言ってる」と連絡があった。日本語に飢えたきたらしい。一度会ったきりの人だけど、おたがい知らない土地なら誰かいると心強い。

こちらの行くタイミングが2月になって、寒いなか、事前に情報収集をしてくれていた。あちらこちら、連れていってもらった。食べて、お茶して、飲んで。途中で急にケータイをだして電話する。

誰に? 思ったら日本にいる知人にだった。相手に羨ましがるように、今どこそこでデートして一緒に何々していると、ハリのある声で話す。こちらに電話をよこして一言しゃべらせる。ご満悦であった。

ソウル住いを十分たのしんだ後、東京に戻ってからは熟年起業の準備をしていた。何度か電話もあった。一度は大阪へきて、北梅田ビルの事務所にも訪ねてきた。たしか5月の初めぐらいだったが、ものすごい汗をかいて入ってきた。

今日そんなに暑い? と思ったことを、後になって思い出した。すでにその時には病が進行していたのだ。家族はいるが、大きな家に独り住まいだった。だから元同僚や部下たちとの交流を大事にしていたのかもしれない。Kさんの家でよく酒盛りをしていると知人が話していたから。

ソウルでデートして、大阪で話して、初対面の時を合わせて直接会ったのは3度。療養生活のことは聞いていたし、気にはなっていたが、そのままになってしまった。

ある日の休日、ケータイが鳴った。画面の表示で誰かわかった。きまづい気持ちもありながら、元気よく出た。こちらのその一声に、ああ、その声…!とって歓喜してくれた。この電話が最後となった。

2023年1月27日(金) 曇→雨

雨がふりだした。ひよっとすると震かもしれない。外がよく見えないから、窓をあけて確認したくなるが、寒いのでやめた。夕方には晴れてくる予報。一月もあと四日。

－ 「玄」とは －

漢字をよく調べる。企画などのコンセプトをひねりだしたい時に、散策と同じくらいよく取る方法。

辞書は2冊買ってある。『新潮日本語漢字辞典』は幅8cm、縦22cmでけっこう重い。『常用字解』(白川静)は一般的なサイズ。

調べたいと思う時は漢字の一字一字なので、使うのはほぼ後者の辞書。経営の経とはそもそもどういう意味なのか、仕事の仕とは、など等。

ちなみに企画の企は、「踵をあげて爪先立ちしている人を横から見た形」で、遠くをみているその姿勢をしているとき人は、何かをのぞむ、くわだてようとしているので、くわだてるの意味となった、とある。

17日から「老子」を再読していて、昨日「玄」という言葉が出てきた。玄人の玄。

『常用字解』には、「糸たばを拗じった形。…赤黒い色彩の感覚が理念化されて幽玄(奥深い)となり…」と続く。

井筒俊彦訳注の本の中では、次のように説明している。

もとも黑色に赤色を混ぜた色を意味する言葉。それは神秘なる深遠さ、現象上の多様性の奥にあり、しかもそれを超えて存在している、絶対的真実の完全な暗闇について言われたもの

「現象上の多様性の奥にあり、しかもそれを超えて存在している、絶対的真実の完全な暗闇」…、読みながら、何かしら言わんとすることがわかる気がした。でも言語化はまだできない。

それでもまずはこうして提示されるから考える機会を得る。思わず「ありがたいことです」と口をついて出た。「絶対的真実の完全な暗闇」…、しばらく頭の中を巡るか。

それはさておき、仕事で知り合い、これから飛躍のステージに入る人の名前に「玄」をもつ人がいるから、次に会ったらこの話をしよう。自分の名前に愛着がますのか、どうか。